

ダンポストによるごみの減量方法について

あきる野ごみ会議

堆肥を作ることよりも、生ごみを土に返して、ごみを減らすことが主な目的です。

- (1) できるだけ食べ残しを減らし、調理くずを出さない工夫（エコクッキング）が大切です。堆肥を作るために生ごみを出しては本末転倒です。
- (2) 熟成した土はプランターに入れて、花などを栽培するための堆肥として使うことができます。量は3か月でダンボール1箱分ほどです。

実際にダンポストを使ってみよう♪

(1) 容器を設置する

- ◎ 段ボール箱の中に入っている基材（「ピートモス」と「もみがらくん炭」を混ぜたもの）を箱に入れます。
- ◎ 生ごみが出たらすぐに投入しやすい台所または風通しのよい場所で雨のからない所に設置します。（ポイント：木の板などを置き、ダンボールの底は必ず床面）から10cm以上浮かせましょう。）
- ◎ 虫が入り込まないように、通気性の良い布などで箱を覆います。

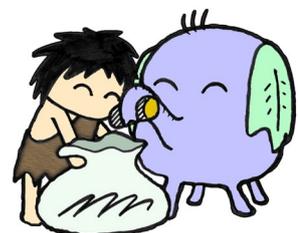
(2) 生ごみを入れる

- ◎ 1日に投入する生ごみの目安は500g（三角コーナー1杯程度）です。水分を切らずに入れてください。
- ◎ 1日1回シャベルで底までかき混ぜてください。
※基材が乾いても湿りすぎても分解が進みません。握って固まる程度の適度な水分が必要です。

(3) 堆肥として使う

3～4か月間、生ごみを投入していくと臭いがしてきたり、ごみの分解が遅くなります。これが終了の目安です。生ごみの投入をやめ、堆肥として使う準備に入ります。

- ◎ 投入終了後の1～2週間、毎日かき混ぜた後、土に混ぜて使用します。
- ◎ 庭の土に混ぜて使う分にはよいのですが、プランターや植木鉢に使う場合は、4～5倍の土と混ぜ、1か月ほどおいてから使いましょう。未分解の有機物は、植物の種や根から酸素を奪ってしまう恐れがあります。



ダンポストの特徴と実施のポイント

空気中の酸素を使って生ごみを水と炭酸ガスに分解するバクテリアの働き

- (1) 空気が全体にいきわたるようにすることが大切です。空気が行きわたらない場所や部分を作ると、臭いの原因になります。
- ◎ 1日1回シャベルでかき回しましょう。
 - ◎ 大きな塊の中の部分は空気が行きわたらない場所です。空気を嫌うバクテリア（嫌気性細菌）が繁殖して腐敗が始まり、臭いの原因になります。
- (2) バクテリアが出来るだけ多く生ごみの表面に繁殖するようにします。そのため、生ごみの表面積を広くする必要があります。
- ◎ 生ごみを細かくして入れるほうが早く分解します。
 - ◎ 貝殻・卵の殻・魚の骨も細かく砕いて入れると、分解して土の中のミネラルになります。
- (3) 生ごみが分解して発生する水分を空気中に逃がしてやる工夫が大切です。
- ◎ 通気性のよいダンボールや木箱を使うようにしましょう。
 - ◎ 木の板などを置き、ダンボールの底は必ず床面から10cm以上浮かせましょう。

量は増えません

毎日、3～4か月生ごみを投入し続けても、ダンボールの中の量は増えませんが、水分を含んで黒色になり、重くなります。量が増えない理由は、生ごみが水と炭酸ガスに分解されて大気中に逃げていくからです。

なかなか生ごみの分解が始まらない場合

ダンポストは、微生物の力で生ごみを分解していきますが、ダンポストを始めてすぐは、微生物の数が少なくてなかなか分解が進みません。2週間ほどすると温度も上昇してきます。2週間経っても分解が進まない場合は、廃食油や米ぬかなどをコップ1杯程度投入し、かき混ぜてください。2～3日で分解が進みます。それでも進まない時は、さらに同量ずつを追加しましょう。

また、白いカビが発生することがあります。これは分解の合図です。そのまま続けましょう。

生ごみ投入終了の目安

ダンポストがべったりとなってきた時や生ごみを投入しても分解が遅くなった、温度が上がらなくなった、アンモニア臭がした時などが合図です。

分解しにくいもの

カボチャ、塩分の多いものやみそ・しょうゆ、ガム、梅干の種、貝殻、大きな骨、タケノコの皮、タマネギの茶色い皮、トウモロコシの芯などは分解しにくいです。

臭いが出ません。

臭いは生ごみがもともと持っている臭いは別として、生ごみが酸化分解せず、嫌気性分解することで発生します。どういう場合にそうなるかという、

- ◎ 投入する生ごみの量が多すぎる場合
- ◎ もともと分解しにくいものが多く投入された場合
- ◎ かき混ぜが足りない場合
- ◎ 水分が多すぎる場合

虫の発生

すき間があると虫が入り、タマゴを産みつけます。虫の発生を防ぐためには、使い古したTシャツやシート、タオルなど通気性の良い布でダンポストの上部を覆ってください。

夏は生ごみが発生してからダンボールに投入するまでの間に、虫が生ごみに卵を産み付け、ダンボール内に持ち込まれることがあります。これを避けるのはかなり難しいですが、たとえ発生しても小さなハエで、あまり気になりません。かまわずかき混ぜましょう。

また、魚などのたんぱく質を入れすぎると虫の発生の原因にもなりますので気をつけましょう。

虫の退治

- ◎ コップ1杯程度の廃食油や米ぬかを入れ、虫が死滅する温度にあげる。
- ◎ ビニール袋に入れて口をしぼり、2日ほど天日干しする。
- ◎ お菓子や海苔などの袋に入っている石灰乾燥剤を500g程度入れ、かき混ぜる。強アルカリになるので虫は死滅します。

堆肥としての質

実際に生ごみ堆肥を使って作物を作った人は、一段とおいしいものが出来ると、口をそろえて言います。

食べ残しごみが中心の生ごみでは塩分が多すぎてだめなんじゃないかと心配する方もいますが、東京農工大学の教授らの実験では問題ないという研究結果が出ています。

冬場はどうするか

寒さで分解しにくい場合は、少量の米ぬかや廃食油を入れ、ダンポスト内の温度をあげてみましょう。

継続して行なう場合

- ◎ 園芸店などで、「ピートモス」12ℓ、「もみがらくん炭」8ℓ（3：2の割合）を購入し、普通のダンボール箱でも行うこともできます。その場合、使用した基材を1／3程度利用すれば最初の分解が早く進みます。
- ◎ 「もみがらくん炭」は、竹炭でも代用が可能です。

水切り

三角コーナーで軽く水を切る程度で良く、乾かす必要もありません。

旅行などでしばらく留守にする場合

留守にする場合は、生ごみを入れないので、かき混ぜなくても問題ありません。旅行前は生ごみの投入を控え、よくかき混ぜて涼しい場所に置いてください。再開するときは、よくかき混ぜて暖かい場所に移動させてください。

耐久年数

耐久年数は、長くて2～3年です。より耐久性を求めるならば、ダンボールではなく、木製の箱を用意すると長く使用できます。

